

彼シエア

離島で男子は自分だけ

優の何気ない一日

執筆：ももえもじ

舞台となる離島は、世界的な流行病によって何年も封鎖されていた。

厳しい渡航制限が設けられており、観光客は言うに及ばず、島民の出入りすら許されていない。徹底された厳戒態勢には賛否があるものの、このお陰で島民は流行病に影響されない穏やかな生活が送れていた。

しかし、良いことばかりではない。環境が換気されなければヒトはストレスが溜まるものである。観光客も移住者も居なければ、辺鄙な島など衰退の一途だ。更に、この制限が原因で島には男性が殆んど居なかった。

島の古い仕来りによって、島の若い男性が研修で本土へと出ていた故である。その最中でのパンデミックであり、男性たちは島に帰ることも叶わず、本土で流浪者へと成り果ててしまう。本島には一つだけ大きな学園があるものの、故に在籍する男子は一人だけとなった。

その、たった一人の名を真嶋優ましまゆうといった。

優は、イジメが原因で永らく不登校となっていた。

全ての男が学園から消えたと聞いて復学を果たすも、それこそ試練の始まりと言わんばかりに、盛大な使命が優を待っていた。

学園に在籍する全ての女子がストレスに苛まれていたのだ。

環境の変化が一切無く、貧困が蔓延。年頃の異性が居ない状況で何年も経つ。要は、欲求不満だった。

もう島には男が居ないとしていただけに、優の復学は学園に衝撃を齎した。

それからは、たった一人の男子を巡っての争いである。

本島は小さな世界であり、みんなが幼馴染のような間柄という。

気安く、愛想良く、自らの欲求を隠すことも無く、性を剥き出して優に迫る。

無二の存在である優を誰かが独占することはせず、朝から晩まで代わる代わるに女子と交わる宿命となった。

それから暫くが経過する。優の暮らしは相変わらずだった。

変わった点と言えば、微かに存在していた筈の倫理までも欠けたくらいだろう。

始めこそ人目を憚っていた女子たち……それも『共有』が暫く続けば、モラルは錆びる一途に堕ちていた。

女子が夢の中で列を成している。優という一人の男へと想いを馳せるように、自らスカートをたくし上げて感情の表現に勤しんでいる。下着を穿いておらず、これは、形となった想いを見せつけるアピール対決だった。

「どう見ても、私が一番濡れてるよね？」

「いや、ちゃんと視てよ。私でしょ。優を視てるだけでイけるんだからッ!!」

「なら、私もだよッ!!」

「私ッ!!」

「優ちゃん。次は、誰とエッチしたい？」

「そうだなあ……」

優が目移りする。女子に緊張感が張り詰める。ドキドキと胸を高鳴らせる。

一人の異性の為に、これだけの人数が必死にアピールしてくれるとは……

感動……の前に、優はコレが夢なのだと徐々に自覚していく。

いくら最近の学園が世紀末化しているとは言え、流石に此処まで酷くはない。優が冷静に分析する。また、夢だと分かりながらも、優の手は止まらなかつた。適当に相手を指名。女子が感涙して股を拡げると、優が重い腰を持ち上げた。「んはああああああつ!!」

そして泣いて悦ぶ女子に、優が持ち前の巨根を深々と突き刺す。

その刺激に女子が体液を撒き散らしては、優も快樂の深みへと沈んでいく。同時に優の射精欲も擽られる。ただ、これは夢なのだ。

ここで射精したら、起きた時が大変だ……と、急に脳が現実性を帯び始める。「ヤ、ヤバツ、ちよつ、ああああ、イツちやうつ……!!」

しかし、どれだけ歯を食い縛っても、動いた腰は止まらなくなっていた。

世界が白に包まれる。目を瞑っているのに、現実世界の情景が浮かんでくる。夢と現実の狭間……そこでの絶頂間際は、恐ろしい程に心地良かった。

経験豊富な優でも、この瞬間には絶対に抗えず、情けない動きで身悶えする。「うっ、ダ、ダメだツ、うあ、あああああつ!!」

射精する一秒前に、優が現実へと戻される。

断末魔の瞬間……自身の下腹部を窺う優。そこに佇む存在を眼にした途端に、優の全身は一挙に脱力した。



「調子に乗ってる、って……そんなことは……」

「え、それマヂで言ってるの!? だったら、ヤバいけど!!」

百恵は優より二つ年下だが、留年の所為でクラスメイトになっている。

復学してから最も世話になっており、だからこそカオスと化した最近の学園をあまり良く思っては居なかった。

状況を受け入れて、所構わず女を侍らせる優にも苛立っていた。

「あのゆうーちゃんが、こんなにも女たらしになっちゃうなんて……ゆうーちゃんにエッチ仕込んだのは私らなのにさ。なのに、最近は私に全然構ってくれなくて。

私の気持ち考えたことある!? 分かるまで止めないからっ!!」

妬み、憎しみ、苦しみ。とは言え、やることは変わらない。

飛び散った精液を舐め取り、再びフェラへと馳せる。こうして優と触れ合える機会が少なくなった以上は会話も億劫に、ただ無心で肉体を貪るしかないのだ。

「ずっ、ずぞぞぞッ!! んちゅっ、んっ、ゆうーちゃんっ……♡」

「うあっ、そ、そんな激しく……」

その後も百恵は、寝起きの絶頂で敏感になった亀頭を容赦なく責め立てた。

今朝は貴重な休養日の予定なのに、百恵の所為で台無しとなる。

それでも、夢精の境地に喘ぐ優。行為は、遅刻のギリギリまで続くのだった。

.....

「んじゃ、私は先に行くね」

「同じクラスなのに、一緒に行かないの？」

「当たり前でしょ。掟を破って此処に居るんだから」

「そ、そうだよね」

「見つかったら大変だよ。じゃ、またね。ちゅっ」

急いで身支度を整えた百恵は、投げキスを残して一足先に学園へと赴いた。

裏口から出ては、こそそと忍びのように林の中へと消えていく。隠密行動は慣れたもんだと言わんばかりの背中を窓越しに見送っていた優も、用を済ませてさっさと家を出た。

百恵の判断は正しい。一人しか居ない男子に、特定の相手への鼻屑は許されていない。みんなの手で作られた協定によって、優は学園の女子を順番に、平等に愛さなければならぬのだ。

協定に基づく全ての女子を彼女として扱い、一日を区切りに順繰りと付き合う流れである。今日もまた、昨日とは別の女子と一日を送らなければならず、その相手は百恵ではなかった。

騒ぎは面倒な百恵は、裏口からコソコソと消えていった。

その日の相手は、共有アプリで確認が出来る。

ただ、アプリを確認するまでもなく、それらは家を出ればすぐに分かった。

「ユウ先輩ツ、おはようございます……」

「あの、来ちゃいました。ごめんなさい」

「あ、いや、大丈夫だけど。絵里ちゃんと芽衣ちゃん、だよね？」

「……ッ!! はいっ!!」

「は、初めてですが、宜しくお願いしますっ!!」

「そんな堅くならなくても……同じ学年だし……一応、恋人関係なんだし……」

「いえいえっ、年上ですから……!!」

寒さからか、緊張からか、頬を紅潮させた二人が優を待ち構えていた。

見覚えのある二人の顔に、優が内心でホツとする。協定を仰ぐ女子の中には、

初対面や先輩も多い。慣れたとはいえ、やはり喋ったこともない者と恋人関係を

結ぶのは抵抗があった。

白川絵里、赤坂芽衣。クラスは違えど同じ一年生であって顔見知りだ。

どちらも身長が低くて完全な喪女という。運動が大の苦手であり、体型も少し

ずんぐりとしている。初めて回ってきた自分の出番に、露骨な緊張感を浮かべて

早口に挨拶を並べていた。

激しく高鳴る心臓を必死に抑えようと、俯く二人が両手を胸に当てている。そんな初々しい態度に、優の緊張が解けて笑みも浮かぶ。

「それじゃあ、行こっか」

と言い、優が絵里、芽衣の間へと自然に割り込む。両手に花の状態だ。

そして……

「ふ、あッ……!!」

「えッ!？」

それは、本当に無意識だった。

優が、目にも留まらぬ速さで二人の頬をそつと優しく啄んだのだ。

照れて佇む二人の頬が、あまりにも無防備だったから……

女子への挨拶はキスがデフォルト……髄まで仕来りが染まってしまった優の、

自然発生的な行動だった。

しかし、絵里と芽衣は初めての相手である。

そもそも二人は、これまでの人生で異性と交流した経験が無かった。

キスは言うに及ばず、これ程の近距離で男と話したことも無かったのだ。

すぐに優が悔いる。時間にして秒にも満たないものの、確かな感触があったと

二人が状況を理解する。と、面白いぐらいの早さで二人は顔を染めた。

「あ、ご、ごめんっ」

「あああああ、だ、だいじよぶ、です……」

「ふあああああ……」

身を硬直させた二人。耳まで真っ赤になり、優の顔を真面に見られず、両手で顔を抑えながら、首を小さく横に振っていた。

頬で良かった。いつも通り唇にしていたら、もっと大騒ぎだっただろう。と、それほど嫌がっていない二人の素振りに、色ボケた男が謎の安堵を抱く。
なんて女たらしだ。

そりゃあ、百恵も怒るだろう……と、頭を下げながら、優が苦く肩を竦める。
キスが当たり前になり過ぎた環境……そして自分に驚いていた。

また、二人は遊蕩児の色狂いに拍車を掛ける反応を見せる。

「い、いえ、その、恋人同士……ですから……」

「嬉しかった、です。こんな私にも、優さんがキスしてくれるなんて……」

「そ、そう？ それは、良かった」

処女でさえこんな態度なのだから、女が苦手だった優も好色に馳せてしまう。
地面の砂利だけを見つめて恋に震える仕草に、優が嗜虐の心と情欲を擦られる。
両手で二人の顎をそっと持ち上げ、強制的に視線を交わすと……

「じゃあ、今度は唇に……」

と言って顔を近付けた。

いまや神格化した優という男。その顔が間近に迫る。処女が視線を泳がせる。

「目、合わせてほしい」

「くくッ!!」

「あ、あううつ……」

インドアな二人。色白の肌だから、余計に赤面が際立っている。最近の優は、自分よりも性に疎い相手を見ると、どうしても弄りたくなってしまうらしい。

まずは、目尻に涙まで浮かべている絵里を標的に選ぶ。芽衣から手を離して、両手で絵里を抱き締める。ビクンと大きく全身を脈打っている。胸部のサイズは控えめであり、心臓の鼓動がダイレクトに伝わっていた。

「めっちゃドキドキしてるね」

「はう、あ、ああ……」

「嫌だった？」

「……そんなこと、ない、です……」

「じゃあ、キスしても良い？ キスしたい？」

「………したい、です……キス、して、くださ、い……」

密着された状態の絵里が耳元で優へと懇願する。消えるような声。緊張で胸が高鳴る様子を伝える羞恥。憧れの相手を全身で感じる高揚感、絵里に精神的なオーガズムを齎せていた。

そんな中での、二度目のキスである。今度は唇同士が重なる。

「んっ……」

「ああああっ、んふうううっ、ふうーっ、ふうーっ、ふうーっ……!!」

もはや自身の客観視なんて出来ない。血液の回転が激しい。荒れ狂ったように鼻息が漏れていることにも、絵里は全く気付いていない。ただただ、全身を蝕む高揚感に意識を持って行かれないように、それだけに集中していた。

また、処女の新鮮な感触は優の下半身も熱くさせる。

ゼロ距離での密着に、股間が徐々に昂りをを見せていく。身長差から、膨らみが絵里の腹部をコツコツと叩きあげる。その正体に気付いた絵里は、男女としての本能を開花させていった。

「あっ、ふあ、ああっ……」

「んっ……舌、挿入れようか？」

「や、やっ、こ、このままで……」

「んっ……分かった」

「ひあ……キスって、こんなに、凄いんだ。頭っ、溶けちゃう……」

「絵里ちゃんの、柔らかくて気持ち良いよ」

「あああ、お、お腹にも、なにか当たってる……こ、これっ……」

「ふわ、なにこれ……絵里……顔真っ赤だよ……脚をもじもじさせて……なんかエロい。視てるコツチまでヘンな気分になっちゃいそう……」

「み、視ないで、恥ずかしい……」

「あああ、次は、私も……？ 私も、あんなっちゃうの……？」

真横で視ていた芽衣もまた、親友の痴態に中てられていた。

絵里とは違い、芽衣は性に対して予備知識すら持ち合わせていない。

股間が正体不明のムズムズに苛まれて激しく動揺する。

それでも動物的な本能によって、閉じた脚を擦り合わせるように動かし出す。

擦れる股間。初めて味わう性的快感に酔い痴れていた。

「ふはっ、はあ、はあ、はあ、はあっ……」

やがて優の唇が離れていく。時間にすれば僅かに一分足らず。ただ、二人には永遠とも思える夢心地だったらしく、それが切り離された瞬間の絵里は、正しく飼い犬のような儂い表情を浮かべていた。

「……どうだった？」

「夢のような時間でした。宜しければ、また……」

「うん。いつでも。特に今日は、恋人同士なんだからね」

「ふわ……♡」

一変して絵里の顔には多幸感が拡がっていた。

絵里がキスをしたのだから、芽衣にも平等に行わなければならない。

優の視線が次に移ると、芽衣は飛び跳ねるように毛を逆立てた。

次は自分の番。優にファーストキスを捧げる。恍惚に酔い痴れる絵里が頭から離れず、あれが自身にも降り掛かると思うと、それだけでチリチリと快樂の渦が毛穴から漏出しそうだった。

既に、現場を目にするだけで濡れ切っていたのだ。

その上でキスをしたら、どうなるのか……想像に至れない芽衣が身震いする。恐怖にも近い感情である。制止の声を出そうとするも、それよりも早くヤリ手な優の唇が塞いだ。

「んっ……」

「んひやあああああああああああああッ!!」

その瞬間に、芽衣は脳汁を迸らせた。

膝がカクンと大きく折れて、そのまま地面へと倒れかけてしまう。

「あ、危ないッ!!」

それを間一髪で受け止める優。自然と、強く抱き締めるような形となった。

芽衣の顔が哀れに染まっていく。燃える顔、沸騰する脳、全身が脱力すると、思いにも依らない事態が起きた。

「あッ、あッ、あッ、あああッ……!!」

「えッ!? ウソ……芽衣ッ!?」

「おわっ……マ、マジかッ!?」

「あッ……あああッ、み、視ない、でッ……ああッ……!!」

芽衣は、恋に恋していた。

恋愛への憧れが人一倍に強く、幼少から妄想を掻き立てていた。

年頃の男子が一人しか居ない以上、妄想の相手は常に優であり……芽衣は日々優との関係を夢想していたと言つて良い。想えば想う程に恋焦がれていた。

念願が叶つて、今日初めて真面に相對する機会が訪れると、それだけで芽衣の胸は一杯である。感無量の中で起きた憧れの人物とのキスやハグに、芽衣の心が一挙に弾けてしまい、それは下半身で形骸化していた。

スカートの中から太腿を伝つて降りてくる神秘……一本が降りたかと思えば、雫はドツとあからさまに波及した。

「あッ、あッ、あッ、あああッ……!!」

「芽衣……マジ!? そこまでユウ先輩のことを……」

「あああッ、止まらない、止まらないのお……!!」

神秘の正体は女潮だった。

感極まって気を失いかけた芽衣の、心身から肥大した感情が形となって降りている。まさかキスとハグだけで……と、これには、性に慣れた優も驚愕した。

当人は、オーガズムすら感じたことのない処女だ。

得体の知れない現象に困惑しながら、あまりの羞恥に泣いていた。

「ごめんなさい……うっ、うううっ……!!」

「だ、大丈夫だよ。気にしないで」

「無理……このまま死んじやいたい……キスされて漏らしちゃうなんて……急に尿意みたいなのがやってきて……でも止められなくて……こんなじや優さんに嫌われちゃう……ふええええん」

「いやいや、寧ろ興奮した。ねえ、こっち向いて」

「む、無理です……恥ずかし過ぎて見られません……」

「ダメ。もつとキスしたくなったから」

「えっ!? あッ、うううッ!!」

百恵の言う通り、優の調子は加速していた。

というより、たった一人の男子として「使命」を感じているのかもしれない。最近の優は、一人で全ての女子を幸せにする勢いだった。

恥じて俯く芽衣の顔をそっと持ち上げる。顎に手を乗せて優しく上向かせる。赤面と嗚咽に塗れた顔面。優と目が合い、より沸騰させていた。

そんな初々しい芽衣に業を燃やした優。

滾る股間をそのままに、密着キスをかました。

「んんんんんんんんツ!!」

「ふわ……連続キス……いいなあ」

「ごめん、無理やりみたいで……でも、芽衣ちゃん可愛くて我慢できなくて」

「ふあああああツ、か、可愛いツ!? そ、そんなこと……あああああツ!!」

「すごい、ユウ先輩……スイッチ入ると、こんな積極的に。はあ、はあ、はあ、男らしいユウ先輩、格好良いよお……」

「あ、当たってる……なにか……んっ、はあ、はあ、ああ、優さんの……」

「ユウ先輩の下半身っ、す、すごいことに……芽衣、どんな感触なの?」

「頭っ、沸騰する。なにも考えられないよお……優さん……あああっ、優さんとキスして……ア、アソコが触れて……ああああツ、幸せ過ぎて死んじゃう」

まるで野獣のように芽衣の唇を貪る優。更に、情欲を極めたペニスガズボンを突き破ろうと暴れており、密着する芽衣の股間と擦れ合う。当の芽衣は、もはや意識も半ばに、幸せを噛み締めるだけだった。

オーガズムに至ったらしく、今度こそ膝から地面へと崩れてしまう。

「はあ、はあ、はあッ、はあ……ああああ……はあ、はあ……」

「すご……こんな真っ赤な芽衣……見たこと無い……」

「キスだけでイッて……気絶して潮まで……芽衣ちゃん、ホント凄かったよ」

「ユウ先輩が凄いんだと思います……あ、あの、また……私にも……」

「うん……」

「ふああああああああああああッ」

「んっ、ふう、ふうっ、絵里ちゃんと芽衣ちゃん……交互にキスするなんて凄く

贅沢だっ、止まらないよ……ああ、二人とも可愛くて瑞々しくて……」

「ふあっ、んっ、ちゅっ、そ、それを言うなら、ユウ先輩も……ああああ……

キスだけで……こんなに女性を幸せに出来るなんて……流石です……こ、これは

確かに、み、みんな奪い合っちゃう……馬鹿らしいと思ってたのに……私も……

ユウ先輩が欲しくなっちゃった……ユウ先輩に愛されたくなっちゃった……もう

好き過ぎて堪らないの……ああああッ」

芽衣を昇天させても、まだまだ優の猛攻は続いた。持て余す絵里へと、再び毒牙が掛かる。

とはいえ、絵里も女の悦びを全開にしていた。

それから、王様の如く絵里・芽衣を交互にキスしていく優。

遅刻は確定だった。

しかし、最近の優にとっては珍しいことではない。

キスに留まらず、優は二人を連れて自室へと戻っていくのだった。